









## 麗人哀歌 (162)

小柴 浩(画)

「庄作さんの家内から、この娘の娘なんですか？」

「あのおきし？」

「さうです！」

沈默が起つた。一種の寂寥な、お

身じろきもせずにゐる。

まるでなく静かに面影が残つ

てゐるのである。

それを眺めてゐた。だが、突撃す

となどはよく知らない多喜子とお鉢

のことである。何の事やらよくも

わからず、静かに庭室のドアへを

開けて中には入つて行くと——龍

太郎はベッドの上に横になつてを

り、その枕頭には博川や、脚筋な

ぞが附き添つてゐる、二人は吃驚

して

「あら、龍太郎さん……！」

「まあお怪我でも？」

心配のあまり、お鉢の眼には、

涙が一ぱいに浮んだ。驕け

宿るやうにしてベッドの傍に立つ

と、顔色はまだひどく蒼いが、

前太郎の心ひられた眼がつこ

りする、博川が傍から

「いや、もう大丈夫です。済し

てご心配なく……」

といつて、搔い揃んで危難を説

明する。二人は、そつと震ひ上つ

て

「まあ……」

でも無事でよかつたと云

ふ意味である。顔を見合はせては

つとした——この間に、醫師は、

また話もあることを終つたも

の、前太郎はやうやく口を開いて

居する、博川さんにも話してゐる

のが、實に殘念なことをした。

今一步でお鉢に口を割らせよう

とするところを不意に後からや

られて……！」

「ただ、確實な證據がないの

だから、多喜子がさう云つて、

くとも、あなたに危害を加へや

うとしたことでもわかりますな

が、眞實の令嬢であるか、大

体の想像はつくではありません

か？」

太郎に差出して

「その子供、誰だかおわかりに

たして？」

受け取った龍太郎は、

「わざつと

散る花咲く花 (2)

まだ龍太郎が麻酔にかゝつたこ

となどはよく知らない多喜子とお鉢

のことである。何の事やらよくも

わからず、静かに庭室のドアへを

開けて中には入つて行くと——龍

太郎はベッドの上に横になつてを

り、その枕頭には博川や、脚筋な

ぞが附き添つてゐる、二人は吃驚

して

「あら、龍太郎さん……！」

「まあお怪我でも？」

心配のあまり、お鉢の眼には、

涙が一ぱいに浮んだ。驕け

宿るやうにしてベッドの傍に立つ

と、顔色はまだひどく蒼いが、

前太郎の心ひられた眼がつこ

りする、博川が傍から

「いや、もう大丈夫です。済し

てご心配なく……」

といつて、搔い揃んで危難を説

明する。二人は、そつと震ひ上つ

て

「まあ……」

でも無事でよかつたと云

ふ意味である。顔を見合はせては

つとした——この間に、醫師は、

また話もあることを終つたも

の、前太郎はやうやく口を開いて

居する、博川さんにも話してゐる

のが、實に殘念なことをした。

今一步でお鉢に口を割らせよう

とするところを不意に後からや

られて……！」

「ただ、確實な證據がないの

だから、多喜子がさう云つて、

くとも、あなたに危害を加へや

うとしたことでもわかりますな

が、眞實の令嬢であるか、大

体の想像はつくではありません

か？」

太郎に差出して

「その子供、誰だかおわかりに

たして？」

受け取った龍太郎は、

「わざつと

散る花咲く花 (2)

まだ龍太郎が麻酔にかゝつたこ

となどはよく知らない多喜子とお鉢

のことである。何の事やらよくも

わからず、静かに庭室のドアへを

開けて中には入つて行くと——龍

太郎はベッドの上に横になつてを

り、その枕頭には博川や、脚筋な

ぞが附き添つてゐる、二人は吃驚

して

「あら、龍太郎さん……！」

「まあお怪我でも？」

心配のあまり、お鉢の眼には、

涙が一ぱいに浮んだ。驕け

宿るやうにしてベッドの傍に立つ

と、顔色はまだひどく蒼いが、

前太郎の心ひられた眼がつこ

りする、博川が傍から

「いや、もう大丈夫です。済し

てご心配なく……」

といつて、搔い揃んで危難を説

明する。二人は、そつと震ひ上つ

て

「まあ……」

でも無事でよかつたと云

ふ意味である。顔を見合はせては

つとした——この間に、醫師は、

また話もあることを終つたも

の、前太郎はやうやく口を開いて

居する、博川さんにも話してゐる

のが、實に殘念なことをした。

今一步でお鉢に口を割らせよう

とするところを不意に後からや

られて……！」

「ただ、確實な證據がないの

だから、多喜子がさう云つて、

くとも、あなたに危害を加へや

うとしたことでもわかりますな

が、眞實の令嬢であるか、大

体の想像はつくではありません

か？」

太郎に差出して

「その子供、誰だかおわかりに

たして？」

受け取った龍太郎は、

「わざつと

散る花咲く花 (2)

まだ龍太郎が麻酔にかゝつたこ

となどはよく知らない多喜子とお鉢

のことである。何の事やらよくも

わからず、静かに庭室のドアへを

開けて中には入つて行くと——龍

太郎はベッドの上に横になつてを

り、その枕頭には博川や、脚筋な

ぞが附き添つてゐる、二人は吃驚

して

「あら、龍太郎さん……！」

「まあお怪我でも？」

心配のあまり、お鉢の眼には、

涙が一ぱいに浮んだ。驕け

宿るやうにしてベッドの傍に立つ

と、顔色はまだひどく蒼いが、

前太郎の心ひられた眼がつこ

りする、博川が傍から

「いや、もう大丈夫です。済し

てご心配なく……」

といつて、搔い揃んで危難を説

明する。二人は、そつと震ひ上つ

て